

Title	金明容「モルトマン(J.Moltmann)の終末論」の翻訳
Author(s)	高, 萬松 / 訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.52, 2012.2 : 262-282
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4218
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

金明容「モルトマン (J. Molmann) の終末論」の翻訳

高 萬 松・訳

《解 説》

聖学院大学と学術交流提携関係を結んでいるソウル長老会神学大学校は『長神論壇』という教授たちの神学論文集を発行している。ドイツの神学者、ユルゲン・モルトマンのもとで学位論文を書いた長老会神学大学校組織神学の金明容 (キム・ミョンヨン) 教授には、モルトマン神学に関して以下のような論文がある。「モルトマンの万有救済論と救済論の新しい地平」『長神論壇』第一六集 (二〇〇〇年)、「モルトマンの三位一体論」『長神論壇』第一七集 (二〇〇一年)、「モルトマンの靈性神学」『長神論壇』第一八集 (二〇〇二年)、「モルトマン神学の貢献と論争点」『長神論壇』第二〇集 (二〇〇三年) などである。

この翻訳は『長神論壇』(第二二集、二〇〇四年) 所収の「モルトマン (J. Molmann) の終末論」という題の論文を、著者の許諾の下で翻訳したものである。論文の構造と内容が分かりやすく書かれているので、内容については特に解説するまでもないと思われる。ただし、*unsterblich* というドイツ語の訳語は日韓で多少異なっている。韓国語の文献ではそれが「不死」(불사) ではなく、「不滅」(불멸) という訳語が用いら

れている。^(訳注1) この論文においてもそうである。しかし、モルトマンの著書の和訳本には以下の訳語が用いられている。すなわち、「魂の不滅」^(訳注2)、あるいは、「魂の不死」^(訳注3)、「不死の魂」^(訳注4)である。本翻訳では、原文に忠実に翻訳するため、「不滅」を用いることにする。

(訳注1) 原注12を参照されたい。以下の韓国語の文献は「終末論」を扱っている。そこにおいても「靈魂不滅」という言葉が用いられている。金均鎮『基督教組織神学Ⅴ』延世大学校出版部、二〇〇五年、一七四―一八五頁「김균진 「기독교조직신학Ⅴ」 연세대학 교출판부」。cf. 延世大学の金均鎮(キム・キュンジョン)教授はモルトマンの下で博士学位を取得した。彼は一九七一年にドイツに留学して、モルトマンに「韓国」を最初に紹介した人物と知られている。(http://news.kukinews.com/article/view.asp?page=1&gCode=kmi&arid=0921302857&cp=nv) (2011.9.30)

(訳注2) モルトマン『神の到来——キリスト教的終末論』連見和男訳、新教出版社、一九九六年、一〇五頁。

(訳注3) 同上書、一〇六頁。

(訳注4) 同上。

一、序

一九六四年に『希望の神学』(Theologie der Hoffnung)を出版し、世界の神学の流れを変えつつ世界の神学界に大き

な影響を与えたモルトマンは、一九九五年『神の到来』(Das Kommen Gottes)を出版して再び世界の神学界を驚かせた。この『神の到来』はモルトマンの終末論をすべて網羅した著述であるが、その中には今までのキリスト教終末論の中で存在しなかった多くの終末論と関連のある重要な内容を含んでおり、また今まで終末論が解決できなかった重要な課題を解決しようとする神学的試みが存在している。ではモルトマンの終末論の新しい内容が何であり、今までの終末論が解決できなかった課題をモルトマンの終末論がどのように解決しようとしたのか。その神学的試みは何であったのか。

二、死は罪の支払う報酬か、生の自然の終末か

伝統的にキリスト教神学は死を罪の支払う報酬と教えた。アウグスティヌス(Augustinus)は死と関連して三段階説を教えた。可能的な不死性「死なないことができる」をもっていた人間は罪によつてこの可能的な不死性を失い、死滅性への状態におちいった。アウグスティヌスによれば死は罪の支払う報酬である。子供の死も罪の支払う報酬である。それは父母からの遣伝的原罪のゆえである。しかも選ばれた人間にはキリストの恩寵による失われることのない不死性が授けられた。これが永遠の命である。このようにアウグスティヌスの思想は一九世紀の自由主義神学が登場するまで、プロテスタント教会とカトリック教会の両方において主導的思想となっていた。

一九世紀の自由主義神学者たちは死が罪の支払う報酬だという伝統的キリスト教の思想に対して強く批判した。彼らによれば死は罪の支払う報酬ではなく生の自然の終末である。シュライアマハー(Schleiermacher)によれば、死はそれ自体悪でもなければ神の審判でもない。それは人間という有限な存在の自然の終末であり時間的限界である。人間の

神意識が罪によつて破壊されたので、人間はこの自然の死を主観的悪として経験し、神の刑罰として感じるのである。シュライアマハーによれば人間が罪のゆえに罪の奴隷となったのではなく、死に対する恐れゆえに死の奴隷となったので、この死に対する恐れは神意識の欠如、すなわち、人間の罪のゆえに人間にもたらされた恐れである。⁽¹⁾

シュライアマハーによればキリストが人間を罪から救い給うたが、キリストの救いはキリストが持つていた強力な神意識を人間の心のうちに入れ、人間の中に神意識を強化させることである。キリストのように強力な神意識を持つようになる人は死の恐れを克服可能であり、救いを得ることもできる。シュライアマハーによればキリストは死を克服したのではなく死の恐怖を克服した救い主である。モルトマンによれば、シュライアマハーが言ったキリストの救いは死んだ体の肉体的救いやうめく自然の実質的な救いと関連せず、至福の状態に至るための宗教的で精神的な状態と関連がある。したがつて死そのものを破壊するキリストの肉体的復活は人類の救いとは何も関連を持つことができなかったとシュライアマハーを批判した。⁽²⁾

カール・バルトの死についての理解は、相当シュライアマハーと類似性を持つが、伝統的なキリスト教の死についての理解と結合されている。バルトはシュライアマハーと類似して死そのものは神の審きではなく有限な人間の本性に属するものと見た。しかしバルトは「事実上 (faktisch) の死」を強調したが、世に存在する事実上の死は罪人の死であり、罪に対する審きと経験される死と見なしている。バルトによればキリストと信仰なしに人間は事実上の死を迎えるようになるが、それは罪人の死であり、罪に対する審きとしての呪いの死である。⁽³⁾ しかし、キリストを通して、そして彼に対する信仰を通してこの不自然の呪いの死から解放され自然の死を迎えるようになる。バルトによればこの自然の死からの解放は、すなわち永遠の命としての解放である。

モルトマンによればすべての死が罪の報酬と呼ばれない。生まれてすぐ死んだ赤ちゃんの死が罪の報酬と呼ばれるか。また第二ペテロ二章四節によれば罪を犯した天使が登場するが、この犯罪を犯した天使たちは不死であり続ける。

そして罪を犯さなくても虚無と死に屈服している被造物も存在する（ローマ八・二〇）。モルトマンによれば創造世界の中には「死なしの罪も、罪なしの死も存在する」⁽⁴⁾。

モルトマンによれば人間は絶え間なく死に至る他人と自分自身に対する罪を犯す。また人間は自分の罪を通して人間でない被造物の中に死を植えておく。今日の地球上の環境的死は人間の罪のゆえである。しかし重要なことは、モルトマンによれば、罪と死の連関性は上述のような実際の連関性の中で言及されるべきで、その実際の連関性を越えて形而上学的運命的關係に拡大してはならない、ということである。アウグスティヌスの中に見える原罪と死との關係は、つまりこの形而上学的運命的關係への發展の一例である。⁽⁵⁾

モルトマンによればシュライアマハーとバルトが言及した自然の死は相当に正統性がある。「生めよ、ふえよ」という創世記第一章の言及はモルトマンによれば既に論理的に人間の有限性と死を前提している。⁽⁶⁾有限な被造物世界の中にあるすべての生きている生命体はいつかは死ぬようになっていく。そのため人間は事実上自然の死を死ぬ。⁽⁷⁾しかし、モルトマンはシュライアマハーとバルトが言及した自然の死に対して反発している。その理由、すべての生きていく生命体の死は真に自然的なのかという質問である。モルトマンによれば生きていく生命体の死は悲しいことで嘆きである。それはまだ完成されていない世の中に存在する被造物の悲しい運命である。現存する死の秩序を自然のものと受け入れられない。なぜならそれは克服すべき何ものかだからである。モルトマンによれば新しい天と新しい地が創造される日、人間は神の子の神的な栄光を受けるようになり、宇宙も神格化（*Vergöttlichung des Kosmos*）される。⁽⁸⁾生きていくすべての生命体に永遠の神の不死性が与えられる。それは未来の神の国と永遠の命を憧れる待ち望みにおける世の悲しい秩序である。

モルトマンとバルトの自然の死についての理解の相違は、二人の神学者の神の創造についての理解が異なっていることにその根源がある。バルトによれば最初の神の創造は善である。つまりバルトは神の本来の創造秩序を善と見なす神

学的前提を持つている。バルトは今日の進化神学や過程神学において多く引用されている継続的創造概念に根本的に反対している。バルトによれば創造世界の中の進化はない。神の本来の創造秩序が完全に善であるゆえに、罪の影響力が除外されたキリストにおける人々の死は善である神の創造秩序に編入され、そのためそれは自然の死である。これに反してモルトマンは最初の神の創造は最後の日に完成される神の創造の光に照らして見るとまだ完全ではない。モルトマンは創造世界の中の進化と神の継続的創造を強調する神学者である。モルトマンによれば最初の創造はまだ傷つけられる可能性を多く抱いている創造である。そのためこの創造秩序は終末の光に照らして見ると変化する新たな側面を持つている。その変化する新たなものの中に有限の生命体の死という悲しい秩序が存在している。モルトマンによれば現存する自然は冬に喩えられる創造世界の時間である。しかし、すべてが新しく創造される新しい天と新しい地はビンゲン (Bingen) のヒルデガルト (Hildegard) の比喩で言うすべてが青く生育する春に喩えられる。モルトマンによればキリストの復活は人間と地と宇宙に永遠の命を約束し贈る事件である。⁹⁾

三、靈魂の不滅が肉体の復活か

「靈魂の不滅が肉体の復活か」(Unsterblichkeit der Seele oder Auferstehung der Toten?) という主題は二〇世紀半ばクルマン (O. Cullmann) によって提起され、個人の死と関連してキリスト教終末論に最も深い衝撃と変化を与えた主題である。¹⁰⁾クルマンは上記のような題の論文で長い間キリスト教が靈魂の不滅の教理を教えてきたが、この靈魂不滅の教理は聖書的思想ではなくギリシャの哲学にその根源を持つ思想であり、キリスト教がギリシャ地域で発展しながらギリシャの哲学を受け入れ教理化させ教えていた誤った教理だと主張した。クルマンによれば初代教会の福音の核心は靈

魂の不滅ではなく死んだ者の復活であった。したがって教会は靈魂の不滅を教えるはならず、死んだ者の復活の福音を教えるべきで、またこれを宣布すべきである。

クルマンが靈魂不滅の教理に反対する理由の背後にはその時まで発展した聖書的人間理解が据えられている。聖書的人間理解はギリシヤ的人間理解とは根本的に違う「全人」(Der ganze Mensch) というものである。すなわち人間は全人で生きて全人で死ぬ。肉体の中に靈魂が入り込んで死ぬときに靈魂が出て行くということではない。クルマンの観点を基礎にしてキリスト教の個人の死についての教理を観察すると、死後靈魂が肉体から出て行つて結局天国や地獄で存在する靈魂の中間期についての思想は、聖書的人間理解とは衝突するギリシヤ化されたキリスト教の教理と評価することができる。

そうすると死後に人間はどんな状態で存在しているであろうか。クルマンによれば靈魂の中間期は誤りであり、死んだ者は眠っているということである。信者たちはキリストの傍らで眠っていて歴史の最後の日、キリストの再臨の日に復活するという。死後眠っているという教理はクルマン以前に既に宗教改革者ルター(M. Luther) が強く主張した教理である。ルターによれば信者たちはキリストの傍らで眠っている。死ぬ日と歴史の最後の日が何千年離れていても、死んだものの時間は生きているものの時間と同じではないので、暫くの間である。今晩眠っていて明日の朝に目が覚めるように、覚めるということである。ルターによればこの眠っている時間の間、死んだ者たちは感覚も意識もない。彼らは神の永遠の時間の中に存在しており、瞬間的に復活の時に至る。今死んでいる人は暫く目をつぶっていると復活の時を迎え、復活して新しい天と新しい地でキリストと共に永遠に生きる。ルターは宗教改革時代の他のキリスト教思想家とは異なつて、ギリシヤ的な靈魂の教理を教えず復活の教理を教えた独特な人であったのである。

しかし、ルターのこの教えは、アブラハムとエノク、モーセとエリヤとすべての使徒たちが現在天国でキリストと共に生きていくということではなく、すべて眠っているという結論に至る。これは聖書の多くの教えと一致しない大きな

難点を持っている。人間を全人と把握し、全人としての逃げの生と全人としての死と全人としての復活を言及することは聖書的であるが、死んだ者が歴史の最後の日まで感覚も意識もなしで眠っているという教理は聖書と衝突する誤った教えである。

モルトマンによれば、死んでキリストと共にある者は意識もあり、感覚もあり、キリストにおいて生きている。彼らには時間と空間が与えられて、死後にも彼らの生は続いて行く。モルトマンによれば死後に継続する生も、やはりキリストと共に続いて行く歴史である。勿論その生は地上の時間と空間的制約を超える新しい形態の生であるが、その生は神の慈悲の時間と慈悲の空間の中で発展と浄化と新しさを含む変化の生であり歴史である。それゆえ死者を眠っている者と規定し、すべての変化と新しさを排除することは誤りである。

死者が眠っているものではなくキリストにおいて生きているならば、そしてギリシャ的概念の死後の靈魂の継続的存在を受け入れなければ、キリストにおいて死者は死から復活を経験するのであろうか。カール・バルト (K. Barth) は二〇世紀の聖書的人間理解であった全人としての人間という理解を受け入れ、全人としての死と、死から経験する肉体の復活を主張した。すなわち人間は全人として死に至り、死から全人に復活するということである。しかし、モルトマンはこのようなバルトの観点を拒否した。モルトマンによれば新しい天と新しい地の肉の復活はない⁽¹¹⁾。死んでキリストと共にいる人々はそれ以上死なない不滅 (unsterblich) の生を続けていくのは事実であるが、死からすぐ肉体の復活に至ることではない。

モルトマンによればギリシャ的靈魂不滅の教理は間違いである。死後、肉なしの靈魂のみの生の持続は聖書の教えではない。モルトマンによれば人間は根本的に体であり、体なしの人間は人間ではない。モルトマンによれば聖書の言う靈魂の不滅あるいは不滅の靈はギリシャ的概念の靈ではない。モルトマンも同様に靈の不滅 (Unsterblichkeit des Geistes) に言及しているが、この靈の不滅は徹底的に聖書的概念でありギリシャ的概念ではない。モルトマンの言う

「生きられた生の不滅」(Unsterblichkeit des gelebten Lebens)を意味する⁽¹²⁾。人間の生命が不滅であるということは不滅の霊である聖霊のゆえである。永遠の命の霊である聖霊は人間と共にし、人間の体の中で働いているので人間の生命は不滅である。しかし、人間の生命が不滅であると言う時、それは人間のある部分の不滅を意味せず、人間の生のある部分の不滅を意味しない。すなわち靈魂の不滅でも、肉なしの私という(Das Ich)存在の不滅、または、存在の核心(Existenzkern)の不滅でもない。モルトマンの言う人間の生命の復活は靈魂と肉体の全体としての人間がこの世で生きられた生の全体を持つ生命の不滅を意味する。モルトマンによれば死後の人間の性(Geschlecht)もこの世の性と同一であろうと推論している。つまりこの世で男性で生きて行った人は死後にも男性、この世で女性で生きて行った人は女性であろう。モルトマンの言う生きられた生の不滅あるいは生きられた命の不滅とは、この世で男性あるいは女性で生きられたその生と経験が死後にも持続されるという意味である。モルトマンは死から起こる断絶に反対する。死後存在する私とは、この世で存在していた私そのものである。この世でのすべての生の経験とこの世ですべての関係を保持していたその私が死後にも持続する。永遠の命である聖霊によって人間は自分が生きていたすべての生を持つ生命体で死後にも存在し、この意味で生きられた生命の不滅であり霊の不滅である。

人間の生命と生が不滅であるということはモルトマンによれば、人間と神との関係のゆえである。地上での人間の生命はその生の初めから最後まで神との関係の中にある。この神との関係の中にある人間の生と生命は不滅である。なぜならそのすべてが神の命の中にあり神の記憶の中にあるからである。モルトマンはアメリカのプロセス神学が人間の生命と生の歴史の客観的不滅性を言及したのに対して肯定している⁽¹³⁾。プロセス神学によれば世の中で起こることは消えず、神の永遠の中に存在する。というのは、そのすべてが神に影響を及ぼして神において記憶されているからである。ハーツホーン(Harshorne)によれば私たちの生の歴史は生の本として残っている。死によってその本の記録が終結されることはできるが、その本がなくなるのではない。永遠の神の記憶の中に存在する⁽¹⁴⁾。

しかしモルトマンは神の記憶の中に存在する人間のすべての生の不滅についての思想を高く評価しつつその持っている深刻な危険性をも指摘している。この世で私たちが行った悪と失敗が永遠に記憶されると死後の永遠の生命はもう一つの苦痛と地獄となるであろう。モルトマンによれば多くの人々が死はむしろこの世の苦痛からの解放であつて平安であつた。彼らにこの世の苦痛の生が不滅であるならばそれは地獄と変わらない。モルトマンによれば憐みと赦しと救いのない永遠の記憶と持続される生の歴史は人間に与えられた希望ではない。モルトマンは言う。神の記憶を天にある自動ビデオフィルム (Videofilm) と思つてはいけない⁽¹⁵⁾。それは赦しと憐みで満ちている記憶であり、生かし正しく救う記憶である。それは私たちに勇気を与え、慰め、希望に満ちている未来を開く記憶である。それゆえ生きられた生命の不滅は喜びと不安が交差する不滅ではなく、希望の未来を開く神の記憶における不滅である。

モルトマンによれば死は人間の滅絶でも体なしの靈魂の生の始まりでもない。それは人間が新しい変化を経験する扉である。死の扉を通過した人間は神の憐みと慈悲の時間と地に永遠に生きている。私という存在、私の名前、私の人格性は死後にも継続される。そして、世で経験したすべての生の歴史を持つて、死後の人間は神の憐みと慈悲の時間と地で神と共に新しい生の歴史を続けていく。そして生の歴史は肉体なく感覚なしの死ではなく、肉体的で感覚的な生である。

四、煉獄教理の肯定性と否定性

煉獄の教理は宗教改革者たちによつて拒否された教理である。モルトマンも同じく宗教改革者たちの精神を受け継いで相当否定的観点を持つている。モルトマンが煉獄教理に否定的立場をとつている重要な理由は、煉獄教理の中には行

為による救いという可能性が本質的に据えられているからである。モルトマンは宗教改革者たちの精神を受け継いで、キリストの死は私たちの救いのために完全かつ十分であるので、死後救いのための人間の努力と行為を要求する煉獄の教理に対して否定的立場を表している。モルトマンによれば、死者の罪のためのミサも不要であり、煉獄での浄化のための刑罰的苦痛も福音に反する。またモルトマンによれば煉獄の存在は聖書の中に明確な根拠もない。⁽¹⁶⁾

しかし、それにもかかわらずモルトマンは煉獄の教理に対する肯定性を表明しているが、その理由はまずこの煉獄の教理が完成 (Vollendung) の時までの中間期 (Zwischenzeit) を仮定し、この中間期と中間状態に対する理解が重要だと見ているからである。モルトマンによれば死者は彼らの靈魂が完成に至るまで中間の状態に存在する。死者は死から直ちに完成に至るとか、最終的刑罰を受けない。死者は神の慈悲の地と慈悲の時間の中で存在する。この神の慈悲の地と慈悲の時間の中に死んだものの靈魂は変化され浄化され新しくされる。この慈悲の地と慈悲の時間を天国と一致させてはならない。モルトマンによれば天国と地獄は最終状態に対する表現である。⁽¹⁷⁾モルトマンは死者が直ちに天国と地獄にいるという表現は使わず、神の中にいるという表現を使っている。この神の中にいるという言葉は、神の慈悲の空間と慈悲の時間の中にいるという意味である。

モルトマンは生まれてから直ちに死んだ子供はどのようになるかという神学的質問を提起した。彼らは地獄に行くのか。天国に行くのか。四歳の時交通事故で死んだ子供はどのようになるのか。この世で人間らしく過ごすことができず飢餓や病で死んだり、戦争で死んだ数多くの第三世界の人々はどうか。モルトマンはこのようなすべての問いに対して、彼らは神の中にいるという言葉で応えている。彼らはこの世を去っているが神の中にいる。彼らは神の慈悲の地と神の慈悲の時間の中で彼らの残りの生を続けていくであろう。

モルトマンによれば死後に中間期があり中間状態がある。ギリシャ正教会が既にこの中間状態を教えていたが、モルトマンはこの中間状態に対する教えは重要だと見ている。しかし、モルトマンはギリシャ正教会の中間状態に対する教

えは、贖罪のための行為と苦行を通した靈魂の完成ではない。それは神の慈悲を通した靈魂の未完成であり、死者のための贖罪のミサではなく、死者に神の慈悲が臨まれることを祈願する死者のための祈りであった。モルトマンはこのようなギリシャ正教会の中間状態に対する教えが正しい教えであると見ている⁽¹⁸⁾。

モルトマンによれば神は人間を刑罰するのではなく、罪を裁く。神は人間に慈悲を表し、罪を取り除く。中間期において人間の浄化と新しさは、火で人間を刑罰する間違った煉獄の教理の刑罰的過程ではなく、人間を正しく新しくする神の慈悲の行為である。人間はこの中間期の神の慈悲の時間と慈悲の地で完成に向けて変化されるであろう。

モルトマンは刑罰と贖罪のための煉獄の教理や贖罪のためのミサに対しては徹底的に反対しているが、最後の完成に至るまでの中間期に対する理解や、死者に神の慈悲が臨まれると祈願する教会における死者に対する祈りは重要だと見ている。モルトマンによれば死者のための祈りは教会の義務であり間違ではない。死によりすべてが終結されるというプロテスタント教会の教えは間違っている。死者も神の慈悲の地と慈悲の時間の中にいる。したがって、死者に神の慈悲が臨むように祈るということは正しいことであり、教会の関心が生きているものに局限されてはいけない。

五、信仰なしに死んだものにも希望はあるのか

二〇〇四年六月五日に韓国組織神学会がモルトマンを招いて「希望の神学四〇年」という主題で講演会を開催した。この時、筆者はモルトマンに「信仰なしで死んだ者に希望はあるか。死者たちの世界に福音が伝えられるというが誰が福音を伝えるのか」という質問をしたことがある。この質問に対するモルトマンの答えは、信仰なしで死んだ者にも希望があると明らかに答え、死んだものたちの世界に福音を伝えるのはキリストであると言った。

モルトマンによれば死者の世界にも福音が宣べ伝えられる。福音を聞く可能性をこの世に生きている間だけに制限したのは間違いである。モルトマンによればキリストはゲッセマネからゴルゴタに至るまでの神から呪われた凄絶な苦痛の瞬間に地獄の苦しみを経験した。キリストの十字架事件は単に人間の罪のみを贖う事件ではない。キリストの十字架事件は地獄を破壊する事件であり、キリストが地獄の苦しみを耐える瞬間であった。キリストが地獄の苦しみを耐えてついに地獄を破壊した。元来の使徒信条の本文にはあったが韓国の教会で使われている使徒信条の中には存在していないキリストが陰府に下って行ったという句は、モルトマンによれば削除してはならない最も重要な句である。モルトマンによればキリストが陰府に下ってついに地獄の壁を壊してしまった。モルトマンは次のように言っている。¹⁹⁾

キリストが地獄におり、地獄の苦しみを受けたため、地獄にも救いの希望が存在する。キリストが地獄から甦られたため、地獄の門は放たれ、地獄の扉は破られた。「地獄の中にも君はおわします」ならば、地獄はもう地獄ではない。「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。しかし、感謝すべき事には、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである」(第一コリント一五章五五節、五七節)

モルトマンによれば地獄は破壊されて死んだ者たちにも福音が伝えられた。地獄の中でもキリストがおり、それ以上出口のない永遠の苦しみは存在しない。

しかし、ここで一つ重要な質問が出てくる。信仰なしで死んだ者は地獄にいるか、そうでなければただ死者の世界の中にいるのか。モルトマンにとって死者は神と共にいて、神の慈悲の時間と神の慈悲の空間の中にいる、とわれわれは既に言及した。死者が神の慈悲の時間と神の慈悲の空間の中にいるならば、地獄の中にいるのではないではないか。ま

たモルトマンは地獄と天国は中間状態の表現ではなく最後の状態に対する表現と理解しているが、そうであるとすれば死者たちの中間期に地獄という表現は相応しくない。本当にモルトマンは地獄があると信じていたのであるか。これに対してモルトマンは次のように言っている。⁽²⁰⁾

地獄は存在しているのか。そうである。わたしは地獄が存在していると信じる。アウシュビッツの恐怖の中で、そしてベトナムの恐怖の中で人々は苦しみの地獄と罪責の地獄を経験した。したがってわれわれは「アウシュビッツの地獄」と「ベトナムの地獄」を話し、これによって無意味で脱出口のない苦しみ、赦されえない罪責、そして神と人間から徹底に呪われたことを地獄と呼ぶ。死後にも地獄は存在するのか。わたしはそうだと信じる。というのは死ぬ前の地獄は死より過酷だからである。多くの人々に死も苦しみと地獄の不安から救出する救いであつた。

上記の引用でわれわれはモルトマンの意図することを正確に把握できる。地獄と天国という言葉が最後の表現であつてもわれわれはわれわれの生において絶え間なく地獄と天国を経験している。地上でも地獄は存在する。アウシュビッツとベトナム戦争は地上で経験する地獄の象徴である。死後の世界においても勿論地獄は存在する。死後にも神と断絶した状態で死んだ者たちは絶え間なく地獄を経験するであろう。ここでモルトマンが強調したいことは死後に死んだ者たちが地獄を経験し地獄の苦しみの中にいるにしても、その地獄が神の慈悲に被われていることである。すなわち、その地獄は出口のない完全な絶望の地獄ではなくその地獄の壁は壊れており神の救いの道が開いている地獄だということである。

信仰なしで死んだ者も神の慈悲の時間と空間の中で存在し、死者の世界にも絶え間なく福音が伝えられたならば万人

救済の可能性はないのであろうか。モルトマンは万人救済論を主張しているのではないか。福音を以て信じる可能性がこの世に限らず死後の世界に拡張することは、福音を聞かず死んだ世代の人々と死後に死んだ人々と、今日も福音を聞く可能性のない特定地域の人々の救いと関連では神学的関心を引き起こす。伝統的神学はこの問題に対して確かな答えを提供できなかった。福音を聞かず死んだ世代の人々がすべて地獄に行ったと答えた場合、それが神の正義に適合している答えかという問いが提起するからである。しかし、死んだ者の世界にも福音が伝えられ、死んだ者の世界でキリストとの真の結合が可能とすれば上記の質問が批判しようとする標的はなくなる。信じないで死んだ人々にも希望があるというモルトマンの答えは長い間伝統的神学が答えられなかった神学的困窮を解決できる重要な神学的枠組みを提供している。しかもモルトマンが死んだ者の世界に伝えられている福音を言及し、死者が神の慈悲の時間と空間の中にいるという教えは終局的に万人救済論に向けているのではないか。

この重要な神学的問題に対してモルトマンはまずバルトを批判した。モルトマンはバルトが「わたしは万人救済を教えてはいないが反対するのではない」という曖昧な答えで最終的答えを回避したことに対して批判した。⁽²¹⁾モルトマンはこの重要な神学的質問に対してブルムハルトの「希望の告白」で自分の立場を先に述べた後、次のように自分の観点を明らかに述べている。⁽²²⁾

私は……次のように言う。私は万人救済論を説教していない。私はすべての人々にキリストの十字架において起こった和解を説教する。私はすべての人々が救われるとは宣布していない。しかし私はすべての人々が救われるまで福音が宣布されることを信じている。普遍主義はキリスト教の宣布の内容ではなくその前提でありその目標である。もし神の未来が実際に「見よ、わたしが万物を新しくする」ということを意味するならば、すべての人々が招かれ誰も排除されていない。これを拒否する人々にも招待は同様に有効である。な

ぜならこの招待は神から来るからである。

モルトマンの立場は明らかである。われわれは万人救済論を宣布してはならない。キリストの十字架によつてすべての人々が和解されたということを宣布すべきである。そしてすべての人々が救われるまで福音は宣べ伝えられるであろう。モルトマンは二重審判論を批判し、万人の救済を希望している。そしてこの希望が遂げられることを期待している。というのはキリストの十字架において万人を救おうとする神の意志が明らかに表れているからである。

六、復活は死から起こるのか

モルトマンによれば復活は死から起こらない。モルトマンによれば復活は死の完全な廃棄と関連づけられており、死者の普遍的復活は新しい天と表れている地で遂げられる。モルトマンは信者たちの復活は千年王国で遂げられ、すべての死者たちの普遍的復活の時は最後の審判以後に遂げられるすべての完成の国である新しい天と新しい地である。モルトマンはイエスの復活は眠っている者たちの初穂で新しい天と新しい地で遂げられる普遍的復活の先取りの事件である。そして千年王国で遂げられる信者たちの復活はすべての死者の普遍的復活ではなく、「死者からの復活」(Auferstehung aus den Toten) であり、これは新しい天と新しい地で遂げられる死者の普遍的復活である。「死者の復活」(Auferstehung s der Toten) とは異なる事件である。モルトマンによればまずイエスの復活があり、その次にイエスに属している信者たちの復活があり、そして最後に神がすべてを完成する国において遂げられるすべての死者の普遍的復活がある。

しかし重要なことはモルトマンが死において信者たちの復活が起こらないと見ているということである。モルトマンによれば死後にも信者たちの変化は継続して起こる。死後信者たちはキリストと共にいて、キリストの中にいる。しかしこのキリストにおける生は継続的な歴史である。キリストの中にいる者たちはキリストとの関係において継続的に変化し、浄化し、新しくされる生の歴史の中にいる。地上での生の歴史は死後にも継続される。モルトマンによれば死から復活が起こると死から生の完成が起こるということを意味するが、それは死後継続される変化と浄化と新しさという生の歴史を否定することであり、死において完全な神的生を受け入れることを意味することであるので誤りである。⁽²³⁾モルトマンによれば地獄と天国のような用語はそれ以上続けられる変化の歴史を拒否する用語で最終状態を意味する概念である。それゆえモルトマンは信者たちが死後に天国にいたるという表現を用いずキリストの中にいると表現している。勿論キリストにおける生は時間と空間がある生であり、目覚めている生であり、キリストとの交わりの中にある生である。そしてその生は地上での生よりさらに大きい神の慈悲の中にある生である。信者たちは死後にもキリストとの絶え間ない交わりの中で神の慈悲を通して変化され、浄化され、新しくなる。このキリストとの交わりの歴史の中で信者たちは千年王国や新しい天と新しい地で生きる完全な人格を備えた者と変化されるのである。

死から起こる復活に対する主張は最近のカトリック神学者たち (K. Rahner, G. Greshake, J. Kremer, J. Pohier, G. Lohfink) によって強く主張されている理論である。⁽²⁴⁾ラーナーによれば死と共に靈魂と肉体の全体としての人間が一つの完全な完成に至り、肉の復活に至るということと、最後の普遍的審判が世界歴史の時間にしたがつて起こると見ているのは決して異端ではない。ローフィンクも人間は死と共に個人的生の完成に至り、最後の普遍的審判を経験し、復活に至るとする観点を強く表している。一九六六年からオランダの教理書には死後の生を新しい肉体を持つ復活のようすばらしい生と言及し、一九七三年に新しく改訂された新オランダ教理書はさらに個人的復活が死において、死と共に起こると明らかに教えている。

最後の普遍的審判が世界歴史の時間にしたがって起こり、死においてこの普遍的審判個人的に経験し、復活に至るならば、個人の死の瞬間が歴史の最後の瞬間とつながっている。そうなるかすべての死者たちは「一瞬間」(in einem Augenblick)、「同時に」(gleichzeitig)、主の日に至り、神の永遠の中で同時に復活に至るようになる。

モルトマンはこのような死から起こる復活に対する主張に対して「新しい地がなければ肉の復活もない」と断言している。⁽²⁵⁾「人間の新しい肉体のための可能性は、ついに新しい地が提供できる」。⁽²⁶⁾「私たちの死から復活が起こるならば、まだ救われていないこの世界から私たちは離脱されて救われることであり、そうなるかこの地との私たちとの連帯性は壊れてしまう」。⁽²⁷⁾モルトマンは地上にある墓が人間と地とが共につながっており、共に救われるということを見せている印ではないかと聞いている。

死で起こる復活に対する教理は今日の多くのカトリック神学者たちが主張する以前に既にプロテスタントの新正統主義神学者たち (K. Barth, E. Brunner) によって強く主張された。⁽²⁸⁾しかし、この理論の根本的問題点は個人の死の瞬間が最後の普遍的審判と同時に理解されているという点である。これは神の永遠の時間を殆ど無時間的に理解することから来る誤りである。既にバルトの神の永遠に対する理解が、バルトが絶え間なく神の永遠は超時間的 (überzeitlich) 現実だと主張したにもかかわらず、クルマン (O. Cullmann) は結局無時間的にしか理解されないと批判した批判を覚える必要がある。すべての死者たちは同時に一瞬間に主の日に至るという思考は誤りである。なぜなら永遠の神にとつて歴史の最後の審判と新しい天と新しい地の建設はまだ未来だからである。世を創造し歴史を始めた神にとつて歴史の未来はまだ可能性として存在している。アブラハムとエリヤとモーセと使徒たちは天国で神と共にいるが、まだ生まれていない人々が天国で神と共にいることはできない。殉教した初代教会の聖徒たちは天国で神と共にいるが、まだ私たちは地上にいる。私たちの死の瞬間が初代教会の聖徒たちの死の瞬間と決して同時的ではない。

死からの復活の教理は聖書的で、そして初代教会歴史に根拠を持つように思われる。カトリック神学者ヤコブ・ク

レーマ (J. Kremer) は聖書が言及している復活は三つの次元を持つていると言い、洗礼の時に起こる復活、死から起こる復活、および歴史の最後に起こる復活と見なしている⁽²⁹⁾。この中で死から起こる復活についての重要な根拠として第二コリント五章一―四節を挙げている。プロテスタント神学者デイヴィス (Davis) も同じく第二コリント五章一―四節の天にある「永遠の家」は天で着るべき天の肉体、つまり復活体である。第二コリント五章二節のその「すみかを上に着る」で上に着るといふ表現は、第一コリント一五章五三節においてパウロの「朽ちないものを着る」という表現に現れているように復活体を上に着る時に表現する典型的表現の方法である。第二コリント五章三節の「それを着たなら、裸のままではないことになるう」で「裸」といふ表現は肉体なし霊魂のみの状態を意味するように見なされる。それゆえパウロは天でのキリスト者の状態は肉体なしの霊魂のみの状態ではなく、復活体を上に着て生きる状態のことを言っていると思われる。

グレスハーケ (G. Greshake) は死から起こる復活の郷里の聖書の根拠以外に初代教会の数多くの文献を通して根拠を提示した。グレスハーケはイグナティウス (Ignatius) の文章や殉教者ポリュカルポス (Polycarp) の殉教を伝える文献などで死から起こる復活を立証する多くの資料を提示した。特にグレスハーケは初代教会の殉教者の神学がはつきりと死からの復活を教えていると主張し、紀元後二二〇年頃と推定されるピオニオス (Pionios) の殉教の場面を次のように引用している。ピオニオスは火刑を受けたが火で燃えてなくなる彼の体から新しい復活体が登場すると言っている⁽³¹⁾。

あそこにいるすべての人々はピオニオスの体が新しい体の肢体を得ているということを見るようになった。
ピオニオスは高貴な耳とさらに美しい髪と鮮やかな顎髭を持っていた。その体のすべての肢体はあまりにも

麗しく、若き青年の如しであつた。炎が彼を若くし、彼に栄光を与え、復活の証とした。

バルトとブルンナー、デイヴィス、クレーマ、グレスハーケ、ローフィンクなど二〇世紀のプロテスタントとカトリックを網羅して数多くの学者たちによつて死から起る復活の教理が主張され、またこれは聖書と初代教会の歴史においてその根拠が据えられている。しかし、最も重要な問題は死から復活が起るならば、歴史の最後に起る普遍的復活は無意味ではないかということである。この問題を解決するためにバルトとラーナーは死ぬ瞬間が普遍的復活の間と神の永遠の観点では同時的だという見方を提示している。

しかし、既に述べたようにこのような解決策は支弁であり誤りである。この問題を解決するためのもつとも重要な神学的観点をわれわれはグレスハーケの教えから見出せる。グレスハーケによれば死から起る信者たちの復活は終末に起る普遍的復活の「先取り」(Antizipation)である。死から起る復活はまだ普遍的復活でない。それは死者の普遍的復活ではなく、死者から(von den Toten)の復活である。そしてこの復活はまだ完成していない。⁽³²⁾モルトマンは死から復活が起るならば、それはすべてのことの完成を意味し、神的生の始めとして認識しているが、この認識は間違いである。死において個人的復活が起ることもそれを完成と同一視する必要はない。グレスハーケによればすべての完成は神が新しい天と新しい地を完成する未来にある。

死後キリストにおける信者たちの状態はどうなるのか。この問題についてモルトマンははつきりと答えない。モルトマンによれば死後の肉体全体としての人間の生であり、地上での生の継続であり、新しい次元での変化と新しさを経験する生である。しかしキリストにおける信者たちの体の状態が復活体でなければモルトマンは地上での肉体や最後に着る復活体と別のもう一つの復活体を仮定すべきであつた。モルトマンは個人の復活を歴史の最後の段階に延ばすことによつて聖書の証言とは一致し難い第三の肉体を仮定するしかない終末論を展開しているのである。

モルトマンの終末論のもう一つの大きな誤謬は死後信者が天国で生きてると宣言せず、キリストの中にいるという曖昧な言葉で表現していることである。勿論キリストの中にいる生が目覚めている生であり時間と空間のある生であり、キリストとの交わりにおける生だということをモルトマンは明白にしているが、聖書が確かに言及している天国という単語を用いていないモルトマンの根本的な考えの中に誤りがある。モルトマンによれば天国は最後の状態に対する表現である。それゆえ死後の信者の生の場所としては不適切である。モルトマンによれば天国や復活はすべて最後の状態に対する救いの象徴である。しかし天国や復活のような概念を歴史の最後の状態に延ばすべき納得可能な聖書的で神学的な根拠があるのであろうか。

モルトマンの終末論がこのような方向に流れる根本原因は、彼がユダヤ教黙示文学的な枠の中で、彼の終末論を展開しているからであらう。そういうわけで彼は信者の肉体の復活を千年王国とつなげて理解し、普遍的復活は死が廃棄されもう存在しない新しい天と新しい地とつなげて理解したのである。しかしわれわれがユダヤ的で黙示文学的伝承を尊重はしても信者の復活を必ず千年王国とつなげて理解すべき必然的根拠はない。モルトマンの言う通り千年王国での信者の復活が「死者からの復活」であるならば、この「死者からの復活」がグレスハークの言ったように天国で起こり、この天国で起こる死者からの復活は最後に起こる普遍的復活の先取りと理解しても大きな矛盾があるとは言えないであらう。

聖書によれば死後のキリスト者は天国にいる。パウロによれば地上の幕屋がこわれると天にある永遠の家がある(第二コリント五・一)。天は神が居る場所、すなわち天国である。聖書の言う「アブラハムのふところ」(ルカ一六・二二)や「キリストと共にいる」(ピリピ一・二三)、あるいは、「パラダイス」(ルカ二三・四三)などはすべて天国での生に対する別の表現である。第二エノク書八章一節によればパラダイスは第三の天にある。この第三の天という表現はユダヤ人たちにとって天が七層に構成されているという一般的世界観に照らして理解すべきである。すなわち

パラダイスは天国を構成するある場所である。ユダヤ人たちの世界観によれば第七の天、つまり、いと高き天に主の御座があり、第三の天にパラダイスがある。イエスが犯罪人の一人に「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と言ったならば、それは主と一緒にいるべき天国でのある喜びの場所を意味すると見てよいであろう。ユダヤ人たちの世界観によればアブラハムを含んだ信仰の祖先たちは皆神と共に天国にいる。モルトマンは神の居る場所が天 (Himmel)、つまり、天国と表現しながら、死後のキリスト者が居る場所を天国と呼ばないのは矛盾である。死後のキリスト者たちがキリストと共にいると見た時、キリストと共にいる場所が天国でなければ、それはどんな場所であろうか。

天国で個人的復活を経験したキリスト者たちは歴史の最後の日に主と一緒に地上に来るであろう。「わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう」(コロサイ三・四)。最後の日は天国の降臨であり天の新しいエルサレムの降臨(黙示録二一・二)である。デイヴィスによれば主と共に現れて復活した者たちの降臨は地上的な視覚で見ると死者の復活である。天国で個人的復活を経験したキリスト者たちも地上的視覚で見るとまだ復活した者たちではない。彼らの墓はそのままであり、彼らはまだ墓の中で眠っている。この地でキリストの名によつて苦難を受け死んだ者たちの名譽もまだこの地では回復されていない。最後の日は天と地が会う日であり、キリストの名によつて苦難を受け死んだ者たちの名譽が完全に回復される日であり、地上で死んだ者たちの復活を経験する日であり、世は変化され天の栄光が世の中に現れる日である。

七、結び

モルトマンの終末論は独特な特徴を持っている。モルトマンは死を罪の支払う報酬や生の自然の終末と見なす既存の神学的観点を拒否し、まだ完成に至らなかつた世の中の悲しい秩序という独特な観点を提起した。また死後の中間期についても靈魂の中間期でもなく、復活した存在としての生もない、神の憐みと慈悲の時間と場所で存在する全人としての人間の変化と浄化と新しさの過程を持つている中間期を提示した。またモルトマンは死者たちの世界で福音が宣べ伝えられると言い、信仰なく死んだ者たちにも希望があり、救いの可能性があると述べている。さらにモルトマンは万人救済と万有救済の可能性まで言及し、新しい天と新しい地で人間と宇宙は神格化されるということを主張した。このような主張は既存の終末論では見ることのできないモルトマンの終末論の特徴である。

特にモルトマンの終末論はキリスト教神学の難題とも言うべきキリストへの信仰なしに死んだ者たちに対する救いに関する問題を宗教多元主義者たちのように他宗教にも救いがあるという観点で救いの可能性を言及したのではなく、死んだ者たちの世界に伝えられる福音という見方で解決策を試みているが、これは独特な見方でこれからも神学的討論の価値があると評価できるであろう。モルトマンは宗教多元主義者たちとは異なつて、救いはただイエス・キリストであり、福音を通してのみ可能だとプロテスタント神学の大主題の上で人類の救いの道を探しているのである。またモルトマンが言及した神の生の変化と浄化と新しさの歴史に対する考えも相当な価値があると思われる。なぜなら死後の生にも変化があるという点は十分に肯定できるからである。しかし、モルトマンが死後のキリスト者の存在を全人として理解しながらも復活については沈黙しているということは、地上での体や復活体でない第三の体を仮定するしかないの

で、大きな神学的問題を起こすとように見られる。また信仰を持って死んだ者たちが当然天国にいと見なさなければならぬにもかかわらず天国という用語を用いず、キリストの中にいるという曖昧な表現を用いているのはモルトマン終末論の問題点であると思われる。モルトマンは死者が居住する場所と死者たちの体の状態について曖昧な表現を捨てて確かな聖書的表現で説明すべきであった。またモルトマンの万有救済に対する希望は二重審判論を教えたキリスト教伝統と大きく衝突するので、これから相当な神学的論争を起こすと推測される。

注

- (1) F. Schlieriemacher, *Der Christliche Glaube I* (Berlin: de Gruyter, 1960), p. 412.
- (2) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes* (München: Kaiser, 1995), pp. 105–107.
- (3) KD III/2, p. 770.
- (4) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes*, p. 109.
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*
- (7) *Ibid.*, p. 110.
- (8) *Ibid.*, p. 111.
- (9) *Ibid.*, p. 110–111.
- (10) O. Cullmann 『靈魂不滅か死者の復活か』(全景淵編訳 『靈魂不滅と死者の復活』(ソウル: 香隣社、一九七五)、一一一―四七

- 頁「진경연편역 『영혼불멸과죽은자의부활』(서울:향린사)」。
- (11) 一九九七年七月二八日から八月九日まで開かれた「ザルツブルク」(Salzburg) 大学主催の行事で「『永遠の生命』(Ewiges Leben)」と題する講演でモルトマンは「新しい地がなければ肉の復活はない」と言及し、「死者の復活は新しい天と新しい地で救われる人類の新しい共同体を形成する社会的復活である」と主張した。
- (12) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes*, pp. 88–96. 訳注：この訳語は以下の翻訳書からの引用である。モルトマン『神の到来——キリスト教的終末論』蓮見和男訳、新教出版社、一九九六年、一二五頁。
- (13) *Ibid.*, p.91.
- (14) *Ibid.*
- (15) モルトマンの「『永遠の生命』(Ewiges Leben)」と題する講演。
- (16) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes*, pp. 118.
- (17) *Ibid.*, p.137.
- (18) *Ibid.*, p.119.
- (19) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes*, pp. 118.
- (20) *Ibid.*, p.177.
- (21) *Ibid.*, p.176.
- (22) *Ibid.*, p.177.
- (23) *Ibid.*, p.137.
- (24) G. Lohfink, *Der Tod ist nicht das letzte Wort* (Freiburg: Herder, 1978); G. Greshake/G. Lohfink, *Naherwartung Auferstehung Unsterblichkeit* (Freiburg: Herder, 1982); G. Greshake/J. Kremer, *Resurrectio Mortuorum* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1986).
- (25) J. Moltmann, *Das Kommen Gottes*, p. 124.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*

- (89) K. Barth, *Die Auferstehung der Toten* (München: 1924); E. Brunner, *Dogmatik III* (Zürich: Zwingli-Verlag, 1964), pp. 435–440.
- (90) G. Greshake/J. Kremer, *Resurrection Mortuorum*, pp. 112–157.
- (91) W. D. Davis, *Paul and Rabbinic Judaism* (Philadelphia: Fortress Press, 1980), pp. 310–314.
- (92) G. Greshake/J. Kremer, *Resurrectio Mortuorum*, p. 182.
- (93) G. Greshake/J. G. Lofink, *Naherwartung Auferstehung Unsterblichkeit*, p. 177.